

筑紫（九州）の萬葉集と風景画シリーズ（第39回）

「防人の歌」 く難波から筑紫へく

・大都会・大阪に今から約1260年前に東国から多くの人々が集まった。西海辺境の守備に当るため西国に向かう「防人」たちであった。

・水島義治著「万葉集防人歌全注釈」には「防人」は「サキモリ」と詠む。「崎守」「岬守」の意で陸地の先端、国土の前端を守備する者の謂れで実際には奈良時代に、大陸勢力の進攻を防禦するために筑紫（今の九州）の沿岸や吉岐・対馬の海岸の崎々・岬々の守護の任に当たった兵士のことである。と述べる。

・防人の任期は三年、東国諸国などから徴発された総勢約三千名と云われている。

防人が国々から役人に引率されて難波津に集結したことが万葉集に載っている。

・萬葉集巻二十には奈良時代の「天平勝宝七歳乙未（755）の二月に、相替りて筑紫に遣（つか）はさるる諸国の防人等の歌」八十四首が収められているが、これは天平勝宝七年二月に交代要員として筑紫に派遣された東国諸国の防人やその父や妻たちの歌である。

・その中に難波津から出港の際に歌った次の防人の歌がある。

やそくに なには つど ふなかぎ あ
1) 八十国は 難波に集ひ 船飾り 我がせむ日ろを

見も人もがも

卷二十一—4329

右の一首は、あしがらのしものこほり かみつよほろ たぢひべのくにひと
足 下 郡の上丁 ・丹比部国人のなり。

* 「足下郡」は今の神奈川県南西隅、小田原市、箱根町、湯河原町等をいう。

* 「上丁」とは21才〜60才の男性の中から選ばれた一般の防人をいう。

（解説）多くの国の防人たちが難波（今の大阪市及びその周辺）に集まって来て

いる。(いよいよ船出だ。) 船に色々と装備して出帆の準備している日の俺の姿を
見てくれる人が欲しい。

2) 難波津に 装ひ装ひて 今日の日や 出でて

罷らむ 見る母なしに 卷二十一—4330

右の一首は、鎌倉郡の上丁・丸子連多磨のなり。

* 「鎌倉郡」は現在の鎌倉市、横浜市戸塚区南部、藤沢市東部などの地域をいう。

(解説) 難波の港で、出航の準備を十分にしておき、いよいよ今日という今日、船出して
任地たる筑紫に下っていくのだ。見送ってくれる母も居ないままに。

(写生地) 古代の難波津の位置については現在有力な説はあるが未だ、はっきりして
いない。防人が筑紫に向かって出港したと見られる現在の大阪港を描く。(杏花)



・万葉集には筑紫に向かつて難波津を出航する時に防人が詠った次の歌がある。

3) 難波門を 漕ぎ出て見れば 神さぶる

なにはと

こて

かみ

いこまたかね

生駒高嶺に 雲ぞたなびく

卷二十一—4380

右の一首は、やなだのこほり かみつよほろ おほたべのみなり 梁田郡の上丁・大田部三成のなり

* 「梁田郡」は現在の栃木県足利市及び群馬県館林市の一部。

(解説) 難波の港から筑紫に向けて出港し大阪湾から、振りかえって見ると、

あの神々しい生駒の山頂に雲がたなびいている。

・生駒山は奈良県(生駒市)と大阪府(東大阪市)との県境にある山(標高642m)である。今は山頂にテレビ局のアンテナの鉄塔が林立し、古代の面影はなくなっている。

・作者は大阪湾から出港の際に遠く離れた故郷のある東方を眺めると難波と大和の境に聳える生駒山とその上の雲を必死に見すえ、見ることでできない懐かしい故郷を想い出していたのではなからうかと思われる。

(写生地) 大阪市内唯一の高台である上町台地は豊臣秀吉が築き徳川幕府によつて再建した大阪城から聖徳太子が建立したという古寺「四天王寺」あたりを経て古社「住吉大社」に至るまでの幅2〜3キロ、長さ約12キロ、標高20mから10mくらいの高台をいう。

・この上町台地の北端、大坂城の南に飛鳥時代・孝徳天皇によつて造営された長柄豊崎宮(前期難波宮)、奈良時代・聖武天皇によつて再建された難波宮(後期難波宮)が築かれていた。難波宮はすぐ近くまで海が迫っていたことが

次の万葉集に詠われている。この歌からも難波津は、この宮の近くにあったことが想定される。現在、難波宮址がある上町台地の西南下に位置する大阪

市中央区高麗橋こうらいはし付近が比定地として有力であるとの説がある。

かよ

なには

あまをとめ

・あり通ふ 難波の宮は 海近み 海人娘子らが

乗れる船見ゆ

卷六―1063 田辺福麻呂歌集

〔解説〕 いつも通う難波宮は海が近いので海人の少女らの乗る船が見えるよ。

〔写生地〕 難波宮史跡公園から「難波宮大極殿跡」と近くにあつた難波の港から古

代防人が筑紫に向かって出港する際に東方にある故郷の方向を振り向き、いつ

までも見続けたと思われる「生駒山」を描く。（池田杏花）

